

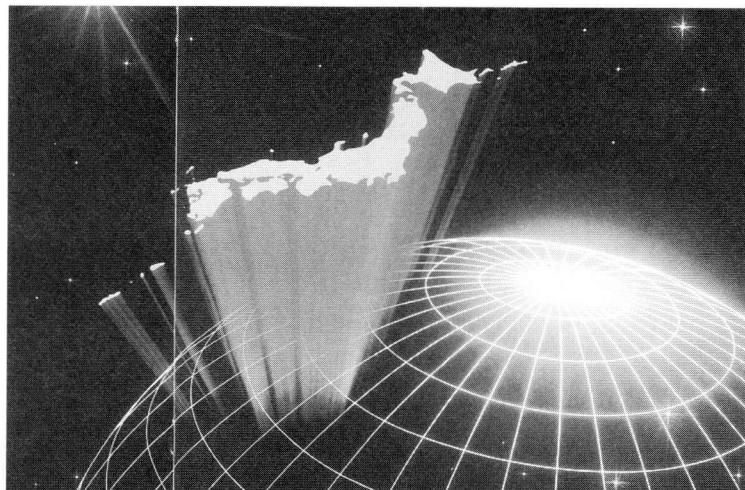
民放唯一の全国放送

短波が伝えた新しいラジオ

～ナイター、株式、競馬中継のあの頃、そして今も～

構成・日経ラジオ社編成報道局 薬師神 美穂子

みんぐくらぶ
30年 放送史
題字 中川順



高度な情報を全国へ発信(MSBのサービスエリア図)

写真・資料提供
日経ラジオ社

送開局の日のタイムテーブル
昭和29年8月27日、日本短波放

株式市場と共に



開局50周年記念書籍

日経ラジオ社(元日本短波放送)は、平成16年(2004年)開局50周年を迎え、これまで親しまれてきた局名「ラジオたんぱ」を、4月から「ラジオN I K K E I」とした。同時に50周年を期にしてラジオの魅力を再確認して頂きたいという願いを込めて「ラジオがくれた贈り物」と題する本を編纂した。前半は、短波の全国放送という特質を生かした初のナイター・レギュラー編成、株式や競馬中継などの歴史を担当者の思い出で綴り、後半は、全国のラジオ愛好者から公募した「ラジオと私」といってべきエッセイで綴られている。その中から、短波放送の移り変わりを偲ばせる4人の番組関係者のインタビューを中心に構成した。

は、午前8時50分『株式市況』と記されている。以来50年余、休むことなく東京証券取引所からの生中継を続けている。

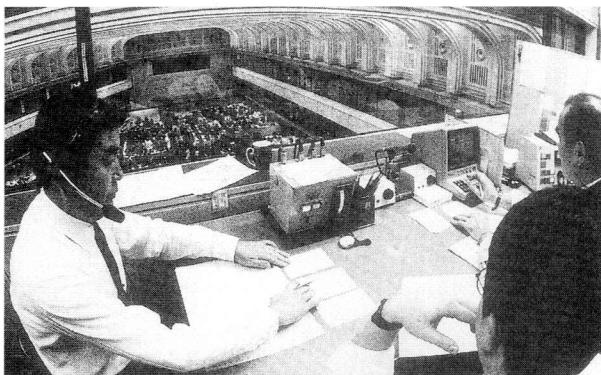
星野明康アナウンサーは昭和37年入社。以来、定年まで38年間、株式市況を読み続けた。



星野明康氏

星野氏が入社したころは、株価の表示はまだ機械化もされていなかつた。株価は手書きで、放送はもちろん生中継。前日の終値との比較も頭の中で計算していた。

「大体30分で交替はするのですが、人間だから間違えることもあります。リスナーから電話で指摘されることもありました。一時期、東証のダウ平均株価(現在の日経平均)を『NSB225種修正平均』として日本短波放送が公表していました。計算し直して訂正してしまった。コンピュータもなく、電卓も高くて買つてももらえない。225



東京証券所2階にあった放送席

は、午前8時50分『株式市況』と記されている。以来50年余、休むことなく東京証券取引所からの生中継を続けている。

星野明康アナウンサーは昭和37年入社。以来、定年まで38年間、株式市況を読み続けた。

銘柄、全部そろばんを使ってその場でやるわけです」。

そろばんと暗算で緊張し通しの実況放送も入社10年後には株価表示がやっと機械化。当初は東証の株券売買立会場をすぐ下に見下ろす二階にあつた放送席も後に三階に変わつたが、いきいきとした株売買の臨場感を伝える興奮や面白さはそのまま変わらなかつた。

「人の動きで売買の熱気が伝わつてきました。あの売買立会場で働く証券マン、『場立ち』の風景に

はじつに人間味がありました。株価が上がつてくるときには拍手が、下がるときには床をどんどん踏み鳴らすとゴーッという音が響いてくる。アリのように人々が集まつてしているところでは、イライラして怒鳴つている人もいる。場立ちは怒鳴つて立会場で、背が高くないと見えないし、注文も早いもの勝ちだから人をかきわけるものも体勢勝負、ラグビー部が向いているなんて言われてましたよね」。

冷静であれと思いつつも、その立会場の熱気こそはドラマティックに伝えたくもあつた。株価が上がりつているときは本人もわくわくし、下がるときは投資家をあまり失望させないよう何度も深呼吸し、できるだけ平静に話すように心がけたという。

「特に思い出に残つているのは昭和62年10月のブラックマンデーのとき。大変でした。床を踏み鳴らす音さえまったくしないし、打つ手がないからシーンとしているだけなのです。悪いニュースばかりだとリスナーが嫌がるから、新聞のスクランブルを伝えるコーナーや企業ニュースを何度も繰り返し伝えてしのぎました」。

は、午前8時50分『株式市況』と記されている。以来50年余、休むことなく東京証券取引所からの生中継を続けている。

星野明康アナウンサーは昭和37年入社。以来、定年まで38年間、株式市況を読み続けた。

銘柄、全部そろばんを使ってその場でやるわけです」。

そろばんと暗算で緊張し通しの実況放送も入社10年後には株価表示がやっと機械化。当初は東証の株券売買立会場をすぐ下に見下ろす二階にあつた放送席も後に三階に変わつたが、いきいきとした株売買の臨場感を伝える興奮や面白さはそのまま変わらなかつた。

「人の動きで売買の熱気が伝わつてきました。あの売買立会場で働く証券マン、『場立ち』の風景に

はじつに人間味がありました。株価が上がつてくるときには拍手が、下がるときには床をどんどん踏み鳴らすとゴーッという音が響いてくる。アリのように人々が集まつてしているところでは、イライラして怒鳴つている人もいる。場立ちは怒鳴つて立会場で、背が高くないと見えないし、注文も早いもの勝ちだから人をかきわけるものも体勢勝負、ラグビー部が向いているなんて言われてましたよね」。

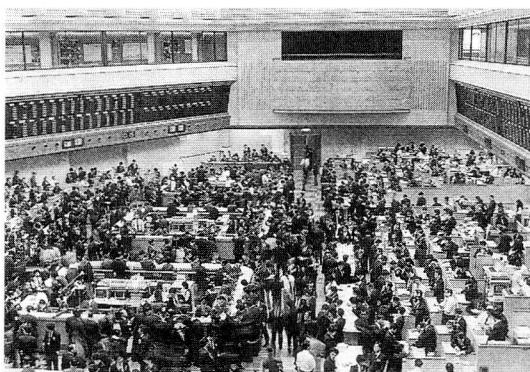
冷静であれと思いつつも、その立会場の熱気こそはドラマティックに伝えたくもあつた。株価が上がりつているときは本人もわくわくし、下がるときは投資家をあまり失望させないよう何度も深呼吸し、できるだけ平静に話すように心がけたという。

「特に思い出に残つているのは昭和62年10月のブラックマンデーのとき。大変でした。床を踏み鳴らす音さえまったくしないし、打つ手がないからシーンとしているだけなのです。悪いニュースばかりだとリスナーが嫌がるから、新聞のスクランブルを伝えるコーナーや企業ニュースを何度も繰り返し伝えてしのぎました」。

星野氏が入社したころ1200円だったという平均株価。それがやがて1万円になり、人々の興奮は3万8900円までずっと続いた。証券マンは昼休みも取れないほど忙しく、誰もが4万円台までいくと信じていた。そしてバブル崩壊。一時は7600円まで下がった株価。その変遷を星野氏はつと見守り、伝え続けた。

その間一貫して「仕事は自分のためじゃない。投資される方がスポンサーだと考えていました。投資家が株を売買されて、証券会社に手数料が入り、その結果、証券会社、証券業協会がスポンサーとして、たんぱを応援してくれる。つまりリスナーがスポンサーなのだ」と全力投球してきた。

印象に残るのは目の不自由な投資家からの手紙だった。株式市況では、似たような会社名は、通常ニックネームで読み上げる。例えばニホンセイコウといったら、日本製鋼の場合は『アーム』、日本精工は『コメコウ』などと呼ぶが、「よくわからないので会社名とニックネームを全部読んで欲しい」と頼まれた。早速それに応えると点字の札状が来た。



場立ちでにぎわう立会場

「今でも自分の宝物としてとつてあります」。

ラジオの良さは言葉に人柄がでることだと思っていて。テレビよりも真剣勝負。見えないものが伝わる怖さと、そしてすばらしさ。たとえば、映像がないから同じ『青』でもどんな青なのか、自分の持つ言葉で表現しなければならない。だからこそニュースは『読む』のではなく、『伝える』ものだと後輩に教えてきた。中身を自分がわかつていなければ、本当に伝えることはできないのだと。

5年前、かつて熱気にあふれた

ナイター連日中継に 日本中が沸く

開局から2年。昭和31年、プロ野球ナイター中継を開始した。受信機の問題、聴取者開拓に苦しんでいた当時「社運を賭す」覚悟で開始した記録が社内に残っている。制作費が月間200万円だった。石川寛氏は当時スポーツ課長として現場の采配をふるつた。

「最初のナイター中継はNHKさんだつたらしい。でもこちらは連日のナイター中継でナイターフアンを定着させましたね」。

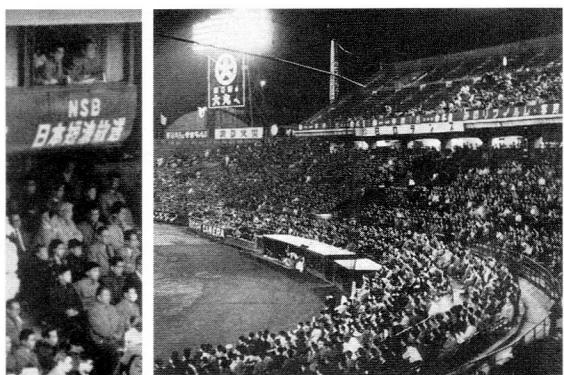
ナイターは球場を照明灯で煌々と照らして野球を楽しむ。その豊かさが人々の心を浮き立たせた。

石川氏のモットーは、聴取者に

東証の立会場はすべてコンピュータ管理となり、2000人もの証券マンがひしめいていた場所にはいまや誰もいなくなつた。

かつてひしめく証券マンの熱い戦いを伝え続けた星野氏の情熱は今、足で集めた企業情報や市場関係者の動向を伝える若い記者たちに受け継がれている。

楽しんでもらうこと。野球放送の中で、可能な限りリアルな音を拾つて盛り上げたい。新しい試みとして、球審にワイヤレスマイクをつけてもらうという企画を考え出した。この案はセ・リーグには断られたもののパ・リーグの二出川審判部長が快諾、駒沢球場の東映一大毎戦で実現した。そのゲーム中、偶然、本墨でトラブルが起り、球審や両チーム監督の声がワイヤレスマイクを通じてラジオから流れ、全国のファンを新たな興奮に誘つた。



NSBのゴンドラとスタンドの観衆(後楽園球場)

雨にも悩まされた。石川氏にとって忘れられないのは昭和32年のオールスター戦。NSBスタッフは部長をキヤップに名古屋に乗り込んだが、前夜来の雨がやまず順延。なんと順延に次ぐ順延が5日間に及んだ。中継班の経費も底をつき、送金を依頼する羽目に。他の民放各局が続々と引き上げていく中、「ナイターのNSBに断念はありえない」と頑張り通し、ついに放送にこぎ着けたのだった。ナイト放送が軌道に乗り始めた頃、石川氏にとって嬉しい異変が起こった。台湾在住者からの投書がたくさん届きだしたのだ。



石川 寛氏

「当時台湾には日本語が解る人が多かつたんですね。嬉しかったです。全然考えていなかつたことです。海外放送じゃないけど海外からお礼の反響がこれだけあらんですから。日本でも台湾でもナイターの時代だつたんですね」

このナイター連日中継が全国で爆発的人気を呼び、短波受信機普



長岡一也氏

問がうかがえる。

昭和36年入社の長岡一也アナウンサーは、競馬中継草創期を知るひとり。実況放送の第一人者として日本ダービーの実況担当を16年間務め、試行錯誤を重ねて競馬放送の基礎を固めた。

「時代とともにファンも変わっていきますね。放送初期のころ

及の契機となつた。放送局として、開局当初の試行錯誤を脱し、新たなステージに入ったと言える。そしてこの流れは、昭和31年10月27日の中央競馬実況中継にもつながつて行つた。

中央競馬実況中継

昭和31年秋の新聞各紙に「短波放送競馬中継開始」の記事が並んでいる。「ナイター連日中継がヒットこんどは競馬実況で穴狙う

「ギャンブル・ファンへ奉仕?」などの見出しに始まる記事からは、

ナイター連日中継の評価の高さと、競馬中継に対する人々の期待と疑問がうかがえる。

昭和36年入社の長岡一也アナウンサーは、競馬中継草創期を知るひとり。実況放送の第一人者として日本ダービーの実況担当を16年間務め、試行錯誤を重ねて競馬放送の基礎を固めた。

には、競馬や競輪などで一身上の重大事に至るような人もいたりしましたが、昭和60年代になるとずいぶんおだやかになりましたね」。そのファンの気持を常に念頭に置き、細かい表現にまで工夫をこらした。



中央競馬場実況放送席

そうすると、かなり皆さんのが持つたのです」。

競馬ファンの心理状態に大きな変化が訪れた、というよりも、競馬ファンの層自体が大きく変わったと言わわれるのは「平成の怪物」

オグリキヤップが活躍した平成2年前後だった。馬ファンの層自体が大きく変わったと言わわれるのは「平成の怪物」

オグリキヤップが活躍した平成2年前後だった。

競馬実況が変わった日

平成2年当時、ラジオたんぱ競馬実況中継の顔として、ダービーなど数々の大レースを実況していく白川次郎アナウンサーは、今でもラジオNIKKEI競馬実況のエースである。

平成2年12月、第35回有馬記念はオグリキヤップが勝った。実況担当は白川アナ。ファンにとって、実況放送そのものも忘れ得ないものになった。このレースこそ、新しい競馬の時代の象徴であり、実況放送の転換点でもあった。

「競馬はゴールインした時に、大体七割の人がやられてチキショー」と言っているんですね。放送のありかたを考えるときに、これは無視できません。ある時、解説者にお願いしたことがあるんです。大穴になつてみんながガッカリしたときは、とりあえず驚いてくださいと。驚いて、そのあと、とにかく勝者をたたえてくださいと。



白川次郎氏

「皆さんがあの実況をいつまで

も記憶していくとしたら、それは二つの要因が重なったおかげだと思います」。

白川アナは、その頃を振り返って語り、一つ目の要因として当時の時代背景をあげた。

「元々競馬の実況放送というのは、競争の経緯と結果を正確に伝えることが使命であり、且つ全てあると言わせてきました。要するに、結果を知るための手段に過ぎなかつたのです。ところが競馬ブームと言われた平成2年頃から、ファンの皆様がその実況にまで目を向けて下さるようになつた」。

「もうひとつはオグリキヤップという希代の名馬が演出したこと跡的な名レースに巡り会えたことです。オグリキヤップはそれまで競馬を知らなかつた人さえ魅了する資質がありました。地方競馬出身、デビューまで無名でしたが、驚異的な根性と闘志で中央競馬を舞台に華々しく活躍した。その生き立ちやすさまじい人気ぶりから、ハイセイコー以来の人気馬“怪物”と言わっていました」。

平成2年。5月の安田記念で初めてコンビを組んだ武豊騎手を背にレコード勝ちをおさめ、人気を



第35回有馬記念ゴールシーンを
デザインしたテレホンカード

400の標識を通過。第四コーナー
カーブ。オサイチジョージ、そ
してオグリキヤップ。オグリキ
ヤップが先頭に並んできた。中を突
いてメジロアルダン。ホワイトス
トーンは内、ホワイトストーンは
内。先団4頭、アルダンがちよつ
と下がるか。メジロライアンが外
から来た。ライアンが来た。
200を切つてオグリキヤップ、
オグリキヤップ、さあ頑張るぞオ
グリキヤップ！オサイチジョー
ジ、ホワイトストーン、そしてメ
ジロライアン！
オグリだ！オグリだ！オグリキ
ヤップ！
オグリキヤップ優勝ゴールイン！
オグリキヤップです！
ファンの夢をここで実現したオグ
リキヤップ。最後の最後を飾りま
した。堂々の優勝であります。
オグリキヤップです。
武豊、手を挙げました。

何という馬でしょう。不調が伝え
られながらこの最後の最後の土壇
場で、見事にあの根性を發揮しま
した。オグリキヤップ見事です。
この歓声をお聞きください。オグ
リコールです。どうぞ皆さんもご
一緒にどうぞ！

白川アナの絶叫もかき消さんば
かりの歓声は、やがて一斉に『オ
グリ』コールに変わった。

「目の前の競馬場を埋め尽くす
ファンはもちろん、ワインズでも、
牧場でも、そしてラジオの前でも、
一緒にこの奇跡を讃えてほしいと
いう思いがこみあげました。『オ
グリコールです。どうぞ、皆さん
もご一緒にどうぞ！』。思わずそ
う叫んでいました。レース自体が
感動的であるならば、それを忠実
に実況するだけで良い実況になる
のです」。

そしてこの日、競馬場で観戦で
きずラジオを聴いていたリスナー
は、どこにいてもラジオを通じて
味わうことのできる一体感を知つ
たのではないだろうか。

時代と共に振る舞うファン心理に寄
り添い、時には先んじながら、中
央競馬実況中継ももうすぐ放送
50周年の節目を迎える。

不動のものにしたオグリキヤップ。馬を、ファンは最後まで見放さな
夏の長期休養後に迎えた秋、三度
目の挑戦となる天皇賞では生涯初
の掲示板にも乗らない6着。不安
の芽が少しづつ見え始めて迎えた
ジャパンカップではオグリキヤッ
プらしい姿を見せぬまま、どうと
う11着に惨敗していた。

「もう限界か、という言葉が飛
び交い、名馬の実績を汚してほし
くない、有馬記念は辞退してほし
いと願う声が圧倒的になつてきました。
オグリキヤップはそういう中でこ
のレースに臨んだのです」。

それでも有馬記念当日、オグリ
キヤップは堂々の四番人気。背水
の陣を敷いて引退レースに臨む名
馬を、ファンは最後まで見放さな
かったのだ。その日の中山競馬場
は、夢を、奇跡をと願うファンに
掲示板にも乗らない6着。不安
の芽が少しづつ見え始めて迎えた
ジャパンカップではオグリキヤッ
プらしい姿を見せぬまま、どうと
う11着に惨敗していた。

埋め尽くされていた。
全国のファンの祈りを背にオグ
リは走った。

400の標識を通過。第四コーナー
カーブ。オサイチジョージ、そ
してオグリキヤップ。オグリキ
ヤップが先頭に並んできた。中を突
いてメジロアルダン。ホワイトス
トーンは内、ホワイトストーンは
内。先団4頭、アルダンがちよつ
と下がるか。メジロライアンが外
から来た。ライアンが来た。
200を切つてオグリキヤップ、
オグリキヤップ、さあ頑張るぞオ
グリキヤップ！オサイチジョー
ジ、ホワイトストーン、そしてメ
ジロライアン！
オグリだ！オグリだ！オグリキ
ヤップ！
オグリキヤップ優勝ゴールイン！
オグリキヤップです！

時代と共に振る舞うファン心理に寄
り添い、時には先んじながら、中
央競馬実況中継ももうすぐ放送
50周年の節目を迎える。